
七つの財宝

ティア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七つの財宝

【Nコード】

N3742A

【作者名】

ティア

【あらすじ】

エルドナという少女が、財宝集めをしながら、たくさんの人々との出会いを経験していくお話です。

プロローグ

アグサ村には、掟があつた。それは、子供たちが十六に達したとき、旅に出ること。そして、課題を乗り越えて、二十になるまでに帰ってくることに。今年もまた、一人の少女がその試練を受けようとしている……

「エルドナ・トゥールキアス、そなたは、我が村の掟に従うことを誓うか。」

「はい！」

目を輝かせた少女は、村人達に囲まれても怯えた様子も緊張した様子もなく、明るくうなずいた。

「そなたの課題は、世界中の国を周り、昔海賊が世界中にばらまいたという、七つの財宝を集めること。そなたに出来るか？」

「とても、やりがいがあります。」

難しい課題だつた。今までもよく出されたが、みな辞退した。大人達はみな心配そうな声を揚げ、自分の实力を見せたがっていた他の子供たちはうらやましげな顔をする。

「三日間、準備期間をあたえてもいいが。」

「結構です。もう、準備はしてあります。余計な時間は、決心を萎えさせるだけですから。」

「いい心がけだ。では、よい旅を。そなたが、たくさんの人々と出会い、別れ、大人になって帰ってくることを願う」

「ありがとう」

村一番の剣士ともいわれるエルドナは、にっこりと笑って手を振った。

第一話

「うーん、最初は、どこにいこう・・・ねえ、どう思う?」

エルドナの愛馬、ホワイトは、困ったようにクーンと鳴いた。

「じゃあ・・・ロルライ村に行ってみようか?あそこなら、近いし、大きな酒場があるし、顔馴染みもいるもの。」

ロルライ村は、村にしては、大きいほうだ。真ん中に宿屋もかねた大きな酒場がある。エルドナは入っていくと、バーテンに声をかけた。

「ねえ、アビー知らない?」

バーテンは、渋い顔をした。

「アビー?おまえ、あいつの知り合いかい?二階で飲んだくれてるから、いつといてくれよ。限界だってな。」

「そう・・・わかったわ。」

エルドナはうなずくと、二階へ上っていった。

「アビー?」

「うーん、なんだよ。」

「私よ。エルドナ。」

「ああ。なんだ。」

エルドナは、隣に腰掛けると、声を潜めた。

「ねえ、七つの宝ってしってる?」

アビーは何もいわずに酒をあおった。

「知ってるのね。ねえ、教えて。」

「知らないね。」

エルドナの古い友人でもあるが、口の堅いことで有名な情報屋は、そっぽをむいて答えない。

「ねえ、あなた、このままじゃ、ここを追い出されるわよ。私はもう旅に出たんだから、あなたを泊めてあげられないし、教えてくれれば、相応のお礼はするわ。」

「・・・おまえがそういうんじゃない、仕方ねえ。だが、俺も詳しいことは知らないよ。一つ目は、ここから、北にしばらく行った、アルテナ村にあつて、二つ目は、王都にあるらしい。三つ目は、チャードっていう、大金持ちがもってるらしい。四つ目は、火山にあるらしいし、五つ目は海のことだという。六つ目は、天の塔にあるらしい。で、集めた六つが指し示すところに、七つ目がある。だがなあ・・・今までもたくさんものかたちが探し、結局見つけられなかったんだ。おまえにやれるのか？まあ、いまじゃ、伝説となってるし、ライバルは少ないんじゃないかな。」

「ありがとう、感謝するわ。」

第二部

アルデナ村は、ロルライ村より北にあり、とても寒い地方だ。

「うーだんだん、寒くなってきたね。それでも、まだまだもん．．．はあー寒いのが苦手なのに、先が思いやられるわあー」

「クーン」

「やっぱり？ホワイトもそう思うでしょ？でも、アルデナ村のどこにあるのかしら？普通においてあるはずないわよね。誰かが隠してるのかしら．．．うーんま、考えてるより、早く行ったほうがいいわね。」

しばらく行くと、雪がふってきた。美しい粉雪ではない。身の危険を感じるほどの大きく、重たい雪で、エルドナはホワイトを急がせた。

「クーン！」

「キヤ！」

目の前に大きな雪の固まりが降ってきた。近くの木から落ちてきたらしい。

「まったく．．．危ないなあーおちおち眠れもしない．．．急がなきゃ！」

とはいっても、アルデナ村までまだ距離はかなりある。仕方なく、エルドナは火を焚こうと思ひ、木のうろを見つけて入り込んだ。

「ごめんね、ホワイト、寒いでしょ？我慢してね．．．あーずいぶん、遠くまできちゃったね．．．今のところ、特に出会いもないしなあ。」

エルドナの目に涙が光る。

「ほら、私、お母さんが、ちいさいころに出てちゃって、ずっとひとりぼっちだったし、旅に出ても淋しくないと思ってたけど．．．いざ、こんな寒いところに来てみるとね．．．みんなの冷たい視線はあつたけど、村のほうに、心地よかつたなあ．．．ま、考えてても

仕方ないよね。くよくよ悩むのは、私のガラじゃあないよ。お休み、ホワイト……」

次の次の昼ごろ、エルドナはアルテナ村にやっとついた。エルドナもホワイトも弱り切っていて、門番に足止めされたときは、本気でおこりそうになり、何とか村に入り、宿屋に入った。

「あーあつたかい。天国だなあ……」

「お嬢さん、見慣れぬ顔だね？どこからきたんだい？」

「南のほうからです。」

「ほう。何のためにきたんだい？」

エルドナは、改めてそのおじさんを見た。

「いや……捜し物があつて。」

「もしかして、七つの財宝かね？」

「えっ、あつ、いや……」

エルドナは、口籠もった。このおじさんが信頼できるかどうかかわからないうちは、ペラペラと口にしないほうがいい。だが、おじさんの顔色が変わった。

「皆の衆！このこは……あれじゃ！とらえろ！」

楽しそうにお酒を飲んでいた人々が、突然険しい表情をして立ち上がった。

「な、何？」

「一つ目の財宝は、我々が命を懸けて守っている。盗もうとするやつは、容赦せん！」

「そんな、盗もうだなんて思つてません！」

「しかし、手に入れたいと思つてここまで来たのだから。」

村のものがエルドナを縛り上げた。エルドナは何が何だかわからず、逆らわずにいた。

第三部

エルドナは、薄暗い牢のなかに放り込まれた。

「ちよつと、なにするのよ！ひどいじゃない！わたしは何もしてないのよ！」

ようやく我に返ったエルドナは、狂ったように叫びはじめた。けれど、もうだれもない。

「あんまり、叫ぶなよ。あいつらは、出してくれないぞ。」

突然後ろから声が聞こえて、エルドナは振り返った。辛うじて、男の姿が見える。

「誰？」

「名前は、キールル。男だ。年はわからない。何年も前にここに入られてそれからずっと牢屋暮らしだ。」

エルドナは、目を見開いた。

「ずっと？そんな・・・いや！いやよ！助けて！」

「そういわれてもなあ、ほら、おまえもあれだろう、財宝を求めてきたくちだろう。」

「まあね。」

「俺もだよ・・・まったく、何で財宝を探そうとした奴らが戻ってこないかがわかるよ。この村の奴ら、よそ者と来たら、すぐ牢屋に入れちまうんだからなあ。」

「このまま、死んじゃうのかな・・・」

「声からすると若いお嬢さんのようだが、不運だったな。」

「不運も何も・・・どうして、この村の人たちは、そんなに必死になつて宝を守っているの？」

「まあ、俺もよくしらんが、その宝がないと、村が不幸に見舞われるらしい。」

「だったら、そういつてくれればよかつたのに。」

「そしたら、何もせず、帰ったか？」

「・・・」

エルドナは大きなため息をついた。男も黙ってしまふ。

と、牢屋の外に人影が見えた。

「出して！出してよ！ねえ、あなたたちのほうがよっぽどいけないことやってるのよ！人をこんなところに閉じ込めて！」

「仕方ないね、お嬢さん、これがこの村の掟だ。ほら、ご飯だ。死なしはしないよ。」

「でも、ずっとここに閉じ込めておくんでしょ！そしたら、いつか死んでしまうわ！ああ、私こんなところで一生を過ごさなきゃいけないほど悪いことしてないわ。」

「いんや、お嬢さんは、わいの村の宝を取りにきなさった。それは、いけないことだ。」

「でも、そんな大切なものなら、無理に取ろうとなんかしなかつたわ。」

「昔、そうやっていったやつがいた。だから、わしらは、離してやった。澄んだ目をした若者だった。彼は誰にもいわないといった。

けれどしばらくして、たくさんの人たちが攻めてきた。先頭には、あの若者がいた・・・わしらは必死に戦った。たくさん村人が死んだよ。」

「それは、かわいそうね。でも、私はそんなことしないわよ。」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。危険はおかせないわな。」

男がいつてしまうと、エルドナは、キールに話し掛けた。

「ねえ、脱走しましょう。」

「脱走？無理だね。ここは岩のなかをくりぬいて作ってある。脱出は不可能さ。」

「そうかしら？」

エルドナは挑戦的な目を投げ掛けると、右手を開いた。

「ナイフじゃないか！どこから、手に入れた？」

「たくさん、身につけてるの。」

「・・・それが、余計村人たちを怯えさせたのかもな。」

「うるさいわね。キーラル、あなた、どの壁が薄いかわらない？」

「さあ。だが、うえに掘ったら、地面に出るんじゃないか？たまに足音がうえから聞こえるときがあるんだ。」

「わかった。あなたは、誰かこないか見張っててね。」

「本当にやる気なのか？」

「もちろん！何でわたしがこんなところで一生を終ええないといけないのよ。」

エルドナは、それから、三日間ぐらい、ぶっ続けて天井に穴を開けた。キーラルは、黙ってそれを見ているだけだったが、村人がくるといつてくれたので、反対する気はないようだった。

「穴があいたわ。」

エルドナは、キーラル にささやいた。ウトウトしていたキーラルは、驚いたようにエルドナをみた。

「もう？」

「ええ。厚かったけどもろかったわ。ところで・・・宝はどこにあるの？」

「手に入れるつもりなのか？」

「あつたり前よ。人をこんな目に逢わせておいて！ただじゃ済まないんだから・・・」

「噂では、この村のほくらに祭つてあるという話だが。」

「そう・・・それは、どこ？」

「たぶん、村の一番奥だと思う。」

「わかった。よるになったら、いくわよ。」

「穴は、どうやって隠してあるんだ？ばれないのか？」

「大丈夫。地面に近いところは、少ししか穴をあけてないの。いざとなれば、力を入れればすぐ開くはずよ。」

「・・・すごいな。だが、あけたら、村人たちのど真ん中っていうのはよしてくれよ。」

「わかってるって。よるなら、そんな心配もないだろうし。問題は、

ほこらまでたどりついて、そこから宝を取り出せるかってことね。よそ者つてだけで、牢屋に入れちゃうような村だもの。きつと、厳重に保管してあるに違いないわ。」

「そうだろうなあ・・・しかし、失敗したら・・・」

「いくらなんでも殺しはしないでしよう、大丈夫よ。それとも、キールル、一生ここで過ごすつもりなの？」

「そ、そんなことはないさ。」

「でも・・・何年もいて、脱走しようとか考えなかったの？」

「まあな。俺はそれなりに悪いことやったから。」

キールルは目を伏せた。エルドナは首を傾げたが、

「ま、いいわ。とにかく、寝ましよう、体力はつけておくのよ。」

「ああ。じゃあ・・・お休み。」

「お休みなさい、キールル。」

第四部（前書き）

少し長めですが、よろしくお願ひします！

第四部

「朝だよ！」

村人が朝食を置いていったのに気付いて、エルドナはキーラルを叩き起こした。

「な、なんだよ。脱走するのは、夜じゃなかったのか？」

「作戦をたてるのよ。」

「作戦？」

「そうよ。私ね、考えたんだけど、どっちかだけは、絶対に逃げるの。それで、逃げたほうがあとから片方を助けに行くのよ。二人で逃げ切るのは無理だと思うの。」

「エルドナ、おまえ、俺と一緒に宝を手に入れようとしているのか？」

「悪いかしら？キーラルは、宝がほしいんでしょう？でも、私は、手に入れて私の村の人たちに見せることが目的なの。見せたら、あなたにあげるわ。それまで、付き合ってよ。一人じゃ何かと心細いし。」

「・・・本気かよ。しかし、なんなんだ？村の人に見せるっていうのは？」

「私の村の儀式みたいなものなの。七つの宝を集めて村に持って帰るのが課題で、そうすると大人になれるのよ。」

「ふーん、かわった村もあるんだな。」

「ここほど変わってないわよ。」

そうこうしてるうちに、夜が訪れた。キーラルは、エルドナの旅を手伝うことに決めた。しかし、エルドナは少し不安だった。キーラルが何者なのかもわかっていないのだから。しかし、男の助けというものは心強いものだから、安心してるようなところもあった。「じゃあ、まず、私を肩車して、私が地面についたら、あなたをひっぱりあげるわ。」

「そんなことできるのか？」

「馬鹿にしないでよね。力はあるんだから。」

「わかったよ。そう怒鳴るなって。」

エルドナは力をこめて、小さな穴にナイフを突き立てた。天井から、バラバラと岩やら土やらがふってきて、キールルは少しむせてしまう。

「静かにしなさいよ！・・・よし、だれもないわ。もっと持ち上げてください！」

キールルは力を入れてエルドナをかかげた。エルドナは、腕の力を使い、自分自身をひっぱりあげる。

辺りは薄暗かったが、酒場の裏辺りだということはわかった。

エルドナは、しゃがみこむと、キールルに手を伸ばした。

「誰もいないわ。捕まって！」

「本当に大丈夫か？俺、結構重いぞ。」

「ぐずぐずしないで！」

エルドナの両手を、キールルがつかんだ。エルドナは、引きずるようにして、キールルをひっぱりあげる。確かに、重かったが、訓練されているエルドナにとって、ひっぱりあげられないほどではなかった。

「ウー・・・ヤッ！」

エルドナは小さな声で掛け声を掛けると、力を入れた。キールルがあがってきて、勢い良く、エルドナのうえに着地する。

「グッ・・・重い・・・」

そっぴいながら、エルドナは初めて月明かりのもと、キールルの顔を見た。

「・・・キールル、あなた、まだ若いのね。」

エルドナと二三歳しかかわらなそうだった。

「おまえも・・・どんなマッチョかと思ったら・・・結構可愛いな。」

「・・・へ、変なこといわないですよ！とにかく、私のうえからどい

てくれない？お腹がつぶれそう！」

「あつ、わりい。」

エルドナは、真つ赤になりながら立ち上がった。キールルがこんなにかつこいいとは思わなかった。

「……ほこらは、どこかしら？」

「向こうじゃないか？入り口と反対だ。」

「ええ。わかった。いくよ！誰もいないよね？」

「ああ、たぶんな。」

「たぶんつて……まあ、いいか。急ごう！」

二人は、走った。全速力というわけではなかったが、村人に見つかってはいけないという焦りが二人の足を急がせていた。

「この村、結構広いのね。寒いし……」

エルドナは呟いた。

「そうだな……あ、あれじゃないか？ほこらっぽい。」

「誰がいる？」

「いないみたいだな」

二人は入り口に近づいた。予想どおり、鍵が掛かっている。

「どうしよう？壊そうか？」

「静かにやれよ。」

「分かってるつて……はずれた！」

「ずいぶん簡単にはずれるものだな。」

「私の腕前がいいといってよ。」

「……ま、泥棒にはなれそうだな」

「ひどいなあ……あれ？何もないよ？」

「……えっ？」

エルドナの言葉に、キールルは、眉をひそめた。

「まさか！もつと奥に隠してあるんじゃないのか？」

「ううん……ないよ！ここじゃ、なかったのかなあ。そんな」

エルドナは泣きそうな顔をして唇を噛んだ。

「おまえたち……見たのか！」

声が聞こえて、二人は振り返った。

「宝がないことがばれてしまったからには、生かしてはおけない。」
「ちよつと待つてよ！宝がないってどういうコトなの？」

「・・・それはだな、まあ、はなしてやつてもよいだろう。我々村人は、宝を代々守ってきた。売ることもせずに大切にしてきたのは、大海賊の子孫、チエーキアス様が恐かったからだ。彼に、宝を守るようにと言われ、その代わり、食物や衣類などをもらっていた。けれども、ある日、宝が盗まれてしまったのだ。」

「盗まれた！？誰に？」

「それが・・・只の奴なら、よかった。だが、大盗賊ギルナだったんだ。宝が置いてあったところに、ギルナの証であるバラの花が置いてあった。それを見たとき、我々は真っ青になったよ。どうしよう、とね。そして、宝がなくなったことはかくしとおす事にした。宝を求めてやつてくる旅人もいたが、話が広まるとまずいからな。おまえたちのように閉じ込めることにしたんだよ。」

「・・・ねえ。」

エルドナは、男を見た。心臓がドキドキしていたが、必死で声の震えを押さえる。

「あなたたち、宝を取り戻したいんでしょ？」

「もちろんだ。」

「なら、私たちが取り戻してあげるわ。」

「そんなこと、信じられないな。」

男は鼻で笑った。

「信じてよ。あなたたち、いつまでも、隠せるとは思っていないですよ？」

「そりゃあ、まあな。だが、ぎりぎりまで・・・」

「ずっと隠していたことをチエーキアスって人に知られたら、あなたたち、殺されるかもしれないわよ。」

「殺される？それは・・・」

男の表情が強ばった。

「私たちがとりもどしてあげる。」

「しかし・・・おまえが言い触らさないとは限らないじゃないか！」

「じゃあ、どうするのよ。このままじゃ、あなたたちは殺される。」

でも、私にかければ、宝は無事帰ってくるかも知れない。」

「おまえは、何がほしいんだ？」

「どういう意味？」

「何を見返りに要求するんだ？」

「少し宝をかしてほしいの。私、アグサ村のものなんだけど、大人の儀式って・・・」

「知ってる。」

「・・・あらそう。」

「私の知り合いもアグサ村出身だ。だがなあ・・・他の村人の意見もきいてみないと。」

「分かったわ。話し合いなさいよ。私は待ってる。」

「本当か？」

「それで、私の気持ちを伝えられるのなら。」

「分かった、おまえには見張りを付けずにおいておく。逃げたら、村中をあげてとらえる。だが、逃げなかつたら・・・考えよう。」

男はエルドナとキーラルを見ながらいった。

「私は、この村の村長だ。トルという。」

「私は、エルドナ。こちらは、キーラル。」

「・・・しかしな、そちらの男を逃がすことには賛成しないな。」

「何故？」

エルドナは眉をひそめた。

「いいんだ。前からそのつもりだったんだ。エルドナ、おまえだけ旅を続ければいい。もし、おまえがまた帰ってきたら、私も離してもらえるかもしれない。」

「でも・・・」

「エルドナ。」

キーラルは、びっくりするほど強い声をだした。

「分かったわよ。よく分かんないけど・・・」

「・・・おまえたち、ずいぶん仲良くなっただみたいだな。」
トルが、少し表情を緩めて言った。

「もしも、彼をここにおいて置くなら、行ってもいいぞ。だが、もしも、誰かに言い触らしたことが分かったら、こいつの命はないと。」

「・・・それは、人質ってこと？」

「まあな。」

エルドナは困った表情でキールルを見た。

「キールル、それでもいい？私は絶対に言わないわ。」

「ああ・・・信じてる。」

キールルは横を向いていくらかぶつきらぼつに言った。

「じゃあ、決まりだ。はつきり言って、他の村人たちの賛同を得るのは難しいだろう。私があとで話しておく。酒場まで、馬と剣を取りにこい。」

トルはきびすをかえすと歩きだした。エルドナは後に付いていく。

「じゃあ、俺は牢屋に戻ってるよ。」

「キールル・・・」

「そんな泣きそうな顔すんなよ。頑張れよ。」

「うん。ねえ、私が帰ってきたら・・・」

「？」

「なんでもない。忘れないよ。私の村長は、旅の間にたくさんのおいしい出会いをなさいつて言ったの。とっても良い出会いだった。・

・・・じゃあね。」

「ああ。」

「色々ありがとうございます。村長さん。」

「いや、私たちも悪かったと思う。突然牢屋にいれたりして。」

「大丈夫です。あの、一つ教えてほしいんですけど、大盗賊ギルナのアジトを知りませんか？」

「アジトねえ・・・」

「探すにしても、何か手がかりみたいなのがないと・・・」

「聞いたことはある。けれど、それはデマかもしれない。」

「いいです。デマでも怒りませんから。」

エルドナはクスリと笑った。

「アジトはなあ、ここから南西に進んだ、サミラ砂漠にあるといわれている。」

「サミラ砂漠！あの誰も横断したことがなく、強い風で日々形が変わるという、あのサミラ砂漠ですか!？」

「そうさ。だから、本当にアジトがあるのかどうかも分からないし、あつたとしても見つけられるかどうか・・・」

「でも、あそこって、王都に近いですよ？」

「ん？まあな、砂漠から少し北に行ったところだ。その馬なら、半日もかからないだろう。」

「なら、行ってみます！私の次の目的地は王都なんです！」

「ほう。しかし、頑張るねえ。何で、そんなに頑張るんだい？」

「私・・・村の人たちを見返したいんです。私のお母さんは、私と同じ、七つの宝を手に入れるって旅に失敗しました。そして、私をお腹のなかに入れて村に帰ってきたんです。当然、お母さんはいじめられたし、ずいぶんつらい目にあつて、私が小さいころに出ていってしまいました。それから、村の人たちは私にも辛く当たって・・・剣ね技も、体力も生きるために身につけたんです。食べるためにだから、村の人たちを見返して、しかもお母さんが出来なかったことをできたら良いなつて・・・」

「辛いことを話させてしまったね。きみなら、きっとできると思うよ。頑張りたいまえ。」

「はい！絶対に約束は守ります。」

エルドナは剣を腰に身につけると、ホワイトに飛び乗った。

「キーラルのことは、丁寧に扱うよ。」

「ありがとうございます。でも・・・彼、あなたたちに何かしたんですか？」

「・・・彼が何か言っていたのかね？」

「ええ。」

「そうか・・・まあ、彼から聞いてほしいな。」

「分かりました。そのためにも帰ってきますね。」

「ああ。南東だぞ！砂漠には入るときには水をたっぷりもっていけよ。」

「はい！」

エルドナはうなずくと、ホワイトの脇を軽く蹴った。ホワイトが軽やかに走りだす。いよいよだ。エルドナは心の中で叫んだ。いよいよ、私の旅が始まる！

第五部

「また二人つきりになったね。」

「クーン」

「あそこの村にいる間、大切にしてもらっていた？」

「クーン」

「・・・まったく、何聞いてもクーンしか言わないんだから・・・」

「クーン」

「砂漠は遠いのよ。急ぎたいけど、王都についても休めるかどうか分からないしね、ゆっくり、行こう。」

「クーン」

「ホワイトだつて、歩いてたほうがらくだよね・・・らくだ？ラクダ！そうだ、砂漠では馬より、ラクダの方が良いんだよね！でも、高いんだろうなあ。ホワイトを手放すわけにもいかないし・・・ま、ついたら、なんとかなるよね！」

それから、約五日間が過ぎた。幸い、小川もあり、水にも食物にも苦勞はせず、唯一足りないものは娯樂だなどと思っていた矢先・・・大きな山がエルドナの前に立ちふさがった。

「・・・何これ。こんな山があるなんて聞いてないよあ・・・あーあ、まだ七つのうちの一つも手に入れていないっていうのに・・・」
エルドナはうなだれながら嘆いた。

「クーン」

「ただの山なら良いけど、何だか深そうな森だしねえ・・・」

「クーン」

「ああ、キーラルがいたら、何かいい方法思いついてくれるかも知れないのになあ。」

「別に思いつかないよ。」

「へ？・・・キーラル！」

振り返ると、馬に乗っているキーラルが笑っていた。お風呂にでも

入ったのか、さっぱりして見える。

「村長がなあ、おまえのお母さんの話を聞いて、おまえを全面的に信頼することに決めたようだよ。」

「わあーよかった！ホワイトは、何言ってもクーンしか答えてくれないんだもん！いやになっちゃうよ。」

二人は並んで馬を走らせた。

「じゃあ、この山を越えるのね？」

「ああ、でも、この山を越えたら、すぐだよ。」

「とは言ってもね・・・何だか、気が重いなあー」

「まあ、頑張れよ。いつも頑張る頑張るっていつてるじゃないか。」

「そりゃあそうだけどさ。」

エルドナはほおを膨らます。キールルは苦笑しながら先立って走っていった。

「あーちよつと待ってよお！」

「おいてくぞー！」

「んー！ホワイト！走れえ！」

第六部

「なんか、怖いよ・・・暗いし、木が襲ってきてぞう。」

森は薄暗く、いやな空気が漂っている。

「ば、馬鹿言うなよ。」

「あ、キーラルル恐いんだね？」

エルドナは悪戯っぽく笑い、キーラルルはあわてて否定する。

「そんなことあるわけないだろ！」

「でも、私も怖いよ。」

「ちよつと、人の話・・・」

エルドナが突然キーラルルの口を押さえた。

「ん、むぐ・・・」

「しっ！何か聞こえない？」

「森にはたくさん生きものがいるからなあ。」

口を押さえているエルドナの手をむしりとりとって、キーラルルは努めて陽気に言う。けれど、返ってきたのは厳しい声だった。

「・・・私の村には、近くに森があったの。そこで私はいつも日々
の糧をえていたんだ。だから、森には詳しいほうなの。」

「ふーん、俺も森に狩りにはよく行ってたが、よくはしらないな。」

「でも・・・この泣き声は聞いたことがない。」

その声は確かに泣き声のようにも聞こえたが、掛け声のようでもあり、とにかく、背筋がぞくつとするものだった。

「まあ、森が違えば住んでる生きものも違っていて事じゃないのか？
キーラルルのことばにエルドナは答えない。じっと耳をこらしていた
が、腰の鞘から剣を抜いた。

「いい剣だな。」

「お母さんの唯一の形見。」

「お母さんのなのか？ずいぶん物騒なものもってるなあ」

「・・・たぶん、お父さんのものだと思う。」

「・・・そつか。」

「やっぱり、なんか変だよ、この森。すごくいやな予感がするし。」
キールルに疑問の目で見られて、エルドナはほおを膨らませた。

「だって・・・女の第六感は鋭いのよ。」

「第六感ねえー」

キールルは肩をすくめただけだった。

日も暮れ、二人はキャンプの準備に取り掛かった。

「なあ、こういう場合、火は焚いたほうが良いのか？」

「火を焚けば、普通の獣はよってこないわ。焚いたほうが良いかもしれないわね。寝たいし。」

「でも、見張りはするべきなんだろう？えーっと・・・どっちが先する？」

「私が先にするわ。何だか不安だし、大丈夫だって事を確かめたいの。」

「わかった。何かあったら、すぐ起こしてくれよ。眠りは浅いほうなんだ。」

「分かってるよ。じゃあ、お休み。ゆっくり休んだ方が良いよ。」

「ああ、おやすみ。」

一人座っているエルドナはキールルの寝顔をみながらふと思っ
た。

「私、何にもキールルの事知らないなあ・・・どういう人なんだろう。どうして、七つの宝を探しているんだろう・・・どの出身で宝を探すまでは何をしてたんだろう・・・あの村にした悪いことってなんなんだろう・・・あはっ私って何でこんな分かんない人と旅してるんだろう！」

エルドナの声は、夜の森の静けさにとけていく。しばらく時間が経ち、エルドナは必死で眠気を堪えていた。もともと睡眠は人より多くとらないと嫌な質なのだ。だんだん目蓋が下がってきて・・・

「ガサガサ」

突然聞こえた音にエルドナは飛び起きた。

「！」

何か忍び寄ってくる気配を感じる。エルドナは剣をつかんで立ち上がった。ついでに、足でキーラルを叩き起こす。

「ん！なんだよー！」

「音の正体が分かった。」

「何？」

「人間よ！動物だとばかり思ってたけど・・・キヤー！」

エルドナは叫び声をあげて倒れた。キーラルは突然のことに茫然として、たたずんでいたが、何か刺激臭がすると気付いたときにはもう目の前が真っ暗になっていた。

倒れて動かない二人に、何人もの影が忍び寄る。けれど、閃光が走り、彼らは切り捨てられた。

第七部

「う……うーん……」

「気が付いたようだね」

「あ、あなたはどなたですか？」

エルドナは、目を開けたら飛び込んできた見知らぬ男の姿に面食らった。

「エルドナ、この人は、僕らが山賊に襲われそうになったところを助けてくれた人だ。」

「山賊？あつ！急に左手に痛みが走って……」

「それは、山賊の使う短剣だよ。毒が塗られていることがおおいから、一応解毒剤を塗っておいた。けれど、毒は強いからね。もしかしたら、後遺症が残るかもしれない。気を付けるんだよ。気を付けるんだよ。」

「ありがとうございます。色々としていただいて。」

「いやいや、礼には及ばないよ。これが、私の仕事だからね。」

「仕事？」

「ああ。私は、王から任じられて、この山の山賊退治にきたテラークという。テラーク將軍とよんでくれ。」

「へえ……山賊退治に……すごいなあ。じゃあ、お強いんですね！」

「いやいや、それほどでも。」

「ところで、ここはどこですか？」

エルドナは辺りを見回した。彼女は簡易ベットに寝ていて、キールも隣の簡易ベットのうえにあぐらをかいている。テラーク將軍は簡易ベットから少し離れた椅子に座っている。どうやら、木でできた小屋にいるようで、ほんのりと木の香がした。

「ああ、ここかい？ここは、山の麓だよ。我々の基地というか……まあ、そんなところさ。」

「へえーあの、私たち王都に行きたいんですけど……ここからどちらの方に行けば着きますか？」

「ああ、王都なら、すぐそこだよ。送っていても良いほどの距離だが、あいにく、私は山を離れられないんだ。悪いね。」

「いえ。山賊から助けてくださっただけでもう本当に感謝してます。」

「キーラルは頭を下げ、エルドナもそれにならう。」

「いやいや。では、何日か休んでいったらどうだね？」

テラーク將軍は柔和な笑みを浮かべる。父親ってこういうものなのかなあと、エルドナは思い、少し胸がキュンとなる。けれど、少女は微笑んだ。

「いえ、もう元気いっぱいです！これから、王都にむかうことにします。」

「そうかい……若いねえー」

「……」

「……」

「……」

「！ははっそうですかあ？テラーク將軍も十分お若いですよ。」
「うらやましげな視線と沈黙に、キーラルははひきつった笑みで答える。」

「お世辞はいらんよ。じゃあ、頑張るんだね。目標をもつことは良いことだよ。」

「ありがとうございます！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3742a/>

七つの財宝

2010年11月18日09時29分発行